

二〇一八國際東亞人文論壇——東方文化與生命哲學國際學術檢討會——

二一ノ宮 聰

二〇一八年八月十一、十二日に北京大學において「二〇一八國際東亞人文論壇——東方文化與生命哲學國際學術檢討會——」が北京大學宗教文化研究院の主催で開催された。本學會は以前に本誌（二一七號、一一九號）で紹介した學會の第九回目となる。

本學會はもともと道教を通じて、中國・日本・韓國を中心とする東アジア地域に通底する文化を検討し、さらに日本の神道や韓國の仙道という各地域の獨自文化との結びつきを考察することで、東アジア地域の文化的・思想的共通性を發見する、という趣旨のもと始められた。

こうした討論を數年にわたり續けた後、近年は大會ごとに主題を決め、より廣い視點から多角的議論を試みている。そしてその成果として、二〇一四年は『東方文化與養生』、一六年は『東方文化與醫道』、一八年は『東方文化與心靈健康』として、二年ごとに大會の發表を収録した論文集が出版されている。

二〇一八年の主題は二〇一七年に續き「生命哲學」であった。ここで言う「生命」とは生き物の「命」という限定した意味ではなく、人間の生命活動のほかに不老長生や昇仙のための修練、さらには鍊丹術、また魂魄觀な

ど宗教的思想や修練方法など様々な意味を持つ。そのため参加者の多くは道教研究者であるが、倫理學や心理學の発表も見られた。参加者は日中韓の研究者だけでなく、アメリカ・コロラド大學の Terry F. Kleeman 教授も二〇一七年に続き、二年續けて参加された。以下、発表者と発表内容を簡單ではあるが紹介する。

八月十一日

午前（開會式）

最初に本學會主催者である金勳教授（北京大學宗教文化研究院副院長）による開會の辭が述べられ、續けて李光富氏（中國道教協會會長）、樓宇烈氏（北京大學宗教文化研究院名譽院長）、蜂屋邦夫氏（東京大學名譽教授）、Terr. F. Kleeman 氏（コロラド州立大學教授）、姜敦求氏（韓國學中央研究院教授）の四名による挨拶があった。開會式に續き基調講演が行われた。以下、発表者と題目を記す。

（基調講演）

司會 王宗昱（北京大學教授）

・樓宇烈（北京大學宗教文化研究院名譽院長）・東方文明與生命哲學

・蜂屋邦夫（東京大學名譽教授）：『老子』河上公注の生命哲學

・Terry F. Kleeman（コロラド大學教授）：張天師與唐代天師道

・徐永大（仁荷大學名譽教授）：古代韓國人的生命誕生觀
基調講演に續き研究発表が行われた。各セッション四名の発表者が20分の発表をおこない、発表後に司會者のレビューと質疑應答が行われる。

午後 第一部（研究発表）

司會 尹龍福（韓國 A S I A 宗教研究院院長）・霍克功
（宗教文化出版社編集部主任）

・詹石窓（四川大學教授）：論「谷神妙用」——老子『道德經』第六章解讀

・内山直樹（千葉大學教授）：『呂氏春秋』和生命哲學

・申鎮植（仁川大學教授）…『東醫寶鑑』の生命觀研究

・尹志華（中央民族大學教授）…唐代道士吳筠的生命哲學思想初探

第二部（研究發表）

司會 內山直樹（千葉大學）・尹志華（中央民族大學）

・車次錫（東方文化大學院大學校教授）…『觀世音菩薩妙應示現濟衆甘露』中の生命尊重思想

・謝路軍（中央民族大學教授）…佛道生命哲學之比較

・長谷川琢哉（親鸞佛教センター研究員）…論井上圓了對進化論哲學的接納

・車瑄根（大巡宗教文化研究所副所長）…大巡眞理會の相生生態論…圍繞理論論爭議

八月十二日 午前 第三部（研究發表）

司會 車瑄根（大巡宗教文化研究所副所長）・嶽遠坤

（北京大學外國語學院助理教授）

・謝清果（廈門大學副教授）…道教養生社會論

・二ノ宮聰（關西大學非常勤講師）…『封神演義』中の生

命觀

・劉麗嬌（湖南大學講師）…淺析清澤滿之的生命哲學

・李映聰（中央民族大學博士課程）…論儒釋道胎教胎養中的生命哲學及融合匯通

總合討論・閉會式

以下、各發表者の發表内容を簡単に紹介する。

樓宇烈氏は、近代に西洋からもたらされた「哲學」という新たな概念が東アジアの思想といかに結びつき定着していったのか。こうして形成された新たな思想的枠組みの中で、いかに生命を読み解き、解釋していくべきか述べた。

蜂屋邦夫氏は、『老子』河上公注の第一章から第二十章に散見する「情慾」という言葉が河上公注の大きな特徴の一つであると指摘した上で、道家的君主が自然長生の道、つまり「常の道」を行うためにはなによりも情慾の除去が必要であると述べる。この道は無爲による養神の事であり、心構えでもあった。さらに情慾の具體例と

して三十二章と五十章の河上公注を取り上げ、河上公が
いかに『老子』を解釋したかについて述べた。

Terry F. Kleeman氏は、唐代道教の發展と張天師の
關りについて、靈寶經にみられる儀式を中心に考察した。
中でも『廢育衆生妙經』に見られる災異觀念を中心に、
善行によってもたらされる善果や悪行によりおとずれる
惡報を避けるための儀禮について述べた。そしてこうし
た儀禮の成立には身分の高い道士が深く関わっているこ
とを指摘した

徐永大氏は、古代韓國とくに新羅滅亡までの九三五年
以前に時代を區切り、生命の誕生というテーマに對して、
生命誕生の充分條件・生命誕生の豫告・生命の轉生とい
う三つの視點から考察し、こうした思想には佛教の影響
が大きいと述べた。

詹石窓氏は、『道德經』第六章の「谷神妙用」に着目
し、まずは「谷」と「谷神」の字義的解釋を行い、「玄
牝」との關係を述べた。さらに「玄牝」と「天地根」と
を解釋するにあたり南宋の俞琰「玄牝之門賦」を引きつ

つ、内丹修練の視點から人々の日常の修練を例に擧げ、
我々が目指すべき健康長壽の實踐について述べた。

内山直樹氏は、『呂氏春秋』「本生篇（孟春紀）」や
「貴生篇（仲春紀）」など「生」を主題とする各篇が『呂
氏春秋』の構成上、如何なる位置づけにあるかを検討し、
そこから『呂氏春秋』に見られる生命觀を検討した。こ
うした生命觀は楊朱らの爲我主義的思想に由来しつつも、
自己と萬物の生命を連續的に捉える全體論的生命觀形成
につながっており、この生命觀の特徴である快適や贅澤
の追求が、かえって生命にとって害となりうることも具
體的に論じられていることを指摘した。

申鎮植氏は、朝鮮王朝中期の一六一〇年に完成した許
浚『東醫寶鑑』に見られる生命觀について、「生命の起
源」、「精・氣・神生命論」、「鍊丹論」という三つの視點
から検討した。従来の韓國の治療醫術は中國醫學に強い
影響を受けていたが、『東醫寶鑑』の登場により養生醫
學觀という韓國醫學独自の醫術が形成される。そして
「内景篇」の「身形臟腑圖」「身形」「精」「氣」「神」と

いう『東醫寶鑑』の中心概念について検討した。

尹志華氏は、唐代の道士・吳筠の著作である『玄綱論』『神仙可學論』『形神可固論』に見られる生命哲學思想を検討することで、道教信仰理論の一端を考察した。そして唐代の外丹や鍊丹服薬を重視する社會的雰囲気の中にあつて、吳筠は精氣神の修練により長生成仙へと至ることが可能であると指摘し、吳筠達が唱えたこうした理論が唐末五代になり内丹術の隆盛に影響を與えたと述べた。

車次錫氏は、高宗九年（一八七二）に結成された佛教系結社であり、觀音を信仰對象とする妙連社の生命尊重思想について発表した。この時代は朝鮮王朝末期にあたり、儒教を中心とする國家制度に限界が見え始める中、佛教は徐々に新たな動きを見せていた。こうした流れの中で妙連社は在家居士により組織された。一八七二年の結成後、四年間にわたり七回の法壇と十一回の衆生説法を各地で實施し、その内容がまとめられ一八七七年頃に成立したのが『觀世音菩薩妙應示現濟衆甘露』（『濟衆甘

露』）である。發表では『濟衆甘露』に見られる不殺生觀や萬物平等思想などを従來の佛教經典と比較した。そして『濟衆甘露』の思想は、法華一乘思想や華嚴性起論の影響を受け、萬物の尊貴や生命尊嚴の顯彰という従來の佛教思想を受け継ぎつつ成立していることを指摘した。謝路軍氏は、道教と佛教の生命に對する認識の違いを認識態度の違い・主觀能動性・具體的修練法の三方面から検討した。最初に佛教と道教それぞれの生命哲學理論について考察し、佛教は現世での修行を重視すると共に、來世への轉生をより重んじ、現世での生は來世のための修練でもあると、生命の循環に價値を重んじるのに對し、道教では修練により長生を得て個體としての生命的質を高めるといふ現世での生の價値を重んじると述べた。そこから佛教と道教それぞれの思想的差異を検討することで、生命に對する認識の特徴を述べた。

長谷川琢哉氏は、明治中期の東京大學で佛教形而上學が形成される際、ハーバート・スペンサーの進化論哲學が與えた影響について考察した。特に井上圓了を例に、

十九世紀における新しい生命思想としての進化論哲學が、東アジアの傳統である大乘佛教と結び附けられ、近代的な宗教思想として再構築される過程について検討した。

車瑄根氏は、生態學という観点から生命（人間）と自然の關係に着目した。そして宗教的解釋・宗教と生態學・深層生態學から相生生態學という三つの観點に基づき、東アジア宗教、特に韓國宗教における生命と自然の位置づけについて考察した。そして、生命と自然の關係に對する思想は古來より様々に議論されてきたが、これらの思想は現代社會においては十分に實踐されていないと述べた。

謝清果氏は、道教で長く續けられてきた養生の實踐において構築されてきた道教養生社會論について發表した。これは延年益壽や羽化登仙を目標とする修道において、具體的實踐だけではなく、精神面つまり理論面も大いに發展してきた。この理論を道教養生社會論と名附けた。そして道教養生社會論の中で構築されてきた、理想的社會モデル、理想的社會統治觀念といった生存理論體系に

關して「太平世」を實現するための道教的解釋を検討した。

二ノ宮は、明代の小説『封神演義』に登場する様々な神仙を取り上げ、彼らの言葉や行動の中にみられる道教的要素を検討した。『封神演義』には道教に關連のある仙人が多く登場している。しかし小説の脚色のために本来の道教と大きくかけ離れている内容も多々見られる。そこで發表では仙人の生死觀に關する場面に着目し、そこに反映される思想的差異について検討した。

劉麗嬌氏は、近代日本の著名な佛教思想家である清澤滿之を取り上げ、近代という大きな時代の流れの中で、清澤の宗教思想體系がいかにも構築されたかを考察した。考察は、存在論・超越論・實踐論の三方面から行った。

そして清澤は哲學的手法を用いて構築を試みたが、構築した考えは宗教的分野に歸屬していたこと、生命哲學理論は佛教思想の再現のために使用されていることなどから、清澤の思想體系は結果として哲學ではなく近代宗教思想改革の中に位置づけせざるを得なくなってしまう

ことについて述べた。

李映聰氏は、道教・儒教・佛教の三教の胎教と胎養に關する思想について各々考察した。考察により儒教では胎教、佛教では住胎、道教では安胎を重視しているものの、互いに共通する思想があること、そして佛教と道教の生命哲學は儒教から大きく影響を受けつつ發展してきたことを指摘した。

總合討論では、姜敦求氏が各發表に對するレビューを行うとともに、發表者に對して質問や今後の研究展望について訊ねた。そして最後に、近年の學會はテーマや分野が細分化されているため、限定的な議論が多くなっている。今後は一つのテーマに複数の研究分野からアプローチをし、廣い視點からの議論を重ねる事も必要ではないかと締めくくった。